

国際引退移動と加齢—日本からタイ・チェンマイへの移動を例に—  
Transnational retirement migration from Japan to Chiang Mai, Thailand

中川聡史 (埼玉大学)・丹羽孝仁 (帝京大学)

Satoshi NAKAGAWA, Takahito NIWA

snakagawa@mail.saitama-u.ac.jp

国境を越えた引退移動 (retirement migration) は 1990 年代以降顕在化し、さまざまな研究分野から研究がおこなわれている。そのなかで、近年注目されている論点の 1 つが移動者の高齢化・加齢である。移動者が 70 歳を超えると、移動先で医療サービス、介護サービスを受ける必要が生じる可能性も高まり、出身国と滞在国の医療・介護サービスの質やコストを比較し、結果的に出身国への帰国を選択する者もみられる (Hall and Hardill 2014)。

本報告は、日本からチェンマイへの引退移動を例に、加齢に伴って移動者にみられる変化について検討する。タイ北部に位置するチェンマイは日本人退職者にも人気の地域であり、在留邦人数 3,221 人のうち 1,441 人が 60 歳以上 (海外在留邦人数調査統計、2017 年 10 月時点) である。また、統計には含まれない冬季に 2~3 ヶ月程度を毎年繰り返す高齢者 (短期滞在者) も多い。日本からチェンマイへの引退移動は 1990 年代以降に本格化し、2002 年には今日まで続く CLL クラブ (チェンマイ・ロングステイ・ライフの会) という日本人ロングステイ者の親睦団体が発足した。日本からチェンマイへの引退移動を対象とした研究は既に多くある (Toyota 2006、河原 2010、Fukahori *et. al.* 2010、Duangkaew 2016、Fielding 2016、Miyashita *et. al.* 2017) が、上記の論点を課題とした研究はない。

報告者らは 2010 年以降、日本人退職者に対するアンケートを主に街頭でおこなった (2010~2011 年 216 人、2015~2017 年 185 人で計 401 人)。街頭で実施したのはロングステイ団体に属さない人や短期滞在者も調査対象となるように意図したからである。調査の結果、チェンマイの日本人退職者は、①1940 年代生まれが 7 割近くを占めていること、②同世代のなかでは高学歴者の割合が高いものの、かならずしも豊かではない、③チェンマイ特有の要因からか、男性単身者の割合が高い、④約 5 年間の変化をみると、定住者 (通年で滞在) の割合が低下し、短期滞在者の割合が上昇した、⑤当初は永住予定と答えていても、健康上の問題から帰国した人がいること、などの特徴をもつことがわかった。特定の出生コーホートへの回答者の集中の要因は日本での定年年齢の上昇が関わっている。その結果、定住者についてはチェンマイより転出が多いと推計される一方、短期滞在者数は増加している。その要因としては高齢化による定住者の帰国と新規転入者の減少、タイの物価上昇、為替レートの変動による円の価値の低下などが挙げられる。また、2019 年には、401 人の回答者のうち連絡先のわかる約 130 人にメールで連絡をし、現在の居住地、チェンマイとの関わりを問い合わせた。集計が完了していないが、かなりの人数が帰国していることがわかった。また、2019 年 3 月時点でチェンマイに残る 10 名に近年の変化に関してインタビューをおこなった。報告では、アンケート調査とインタビュー調査の結果を報告し、加齢と引退移動の関係について検討する。